

中学生における“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係

三浦直樹¹⁾

原岡一馬²⁾

本研究では、“社会とのつながり”の構造について因子分析を用いて探索し、“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係について検討することを目的とした。被調査者は、391名の中学生および高校生であり、“社会とのつながり”と心理的幸福感の質問紙調査が実施された。心理的幸福感の測定尺度としては、疎外感尺度および充実感尺度を用いた。それらは、孤独感、空虚感、圧迫感、無力感、自尊心、充実感の因子から構成された。因子分析の結果、受容的つながり、道具的つながり、貢献的つながりの3因子が抽出された。相関分析と分散分析の結果、「受容的つながり」は孤独感、空虚感、圧迫感、無力感と負の関係がみられ、自尊心、充実感と正の関係がみられた。「道具的つながり」および「貢献的つながり」についても、いくつかの心理的幸福感の尺度との間に相関がみられた。また、つながりの頻度と心理的幸福感の関係におけるつながりの重要度の効果も検討された。「受容的つながり」と空虚感、「貢献的つながり」と自尊心の関係において交互作用が見られ、重要度の効果が示唆された。これらの結果から、中学生および高校生にとって、特に「受容的つながり」を主とした“社会とのつながり”が心理的幸福感と関係していることが示された。

キーワード：中学生、高校生、社会とのつながり、心理的幸福感。

問 題

不登校や頻発するいじめなど、現代の中学生および高校生をめぐるさまざまな問題が指摘されている。その理由として、対人的な“つながり”の希薄化や心理的居場所の欠如などを指摘しているものは多い(e.g. 成田,1988; 堤,1993; 村山,1992)。また、発達的な見地からも、中学および高校という青年期は「親や先生、仲間や地域の人々との相互作用を通じ、ものの考え方、価値観、行動の仕方を学習し、内面化していく」(狩野,1985a)という社会化の過程でもあり、対人的な“つながり”が重要であると考えられる。このように、中学生の対人的な“つながり”に焦点を当てることは、直面している諸問題を考える上でも有用であると思われる。

さて、対人関係における“つながり”については、これまでも教育心理学や社会心理学の分野でもさまざまな研究がなされてきている。その中の代表的なものとして、ソシオメトリーを用いた研究とソーシャルサポート研究があげられる。

ソシオメトリーによる研究では、例えば、楠見(1986)は、公立中学校における学級集団の大局的構造の変動を、全体構造を単純化し集約して表現する技法としてのコンデンセーション法(狩野,1985b)を用いて捉えている。その結果、男子は集中化構造へ向かって変動し、女子は分散化構造が大半を占め、変動がほとんどみられなかったことを明らかにしている。このように、ソシオメトリーは自発的動機で形成されるインフォーマル構造を全体的・大局的観点から明らかにする方法として、教育心理学の分野で用いられてき

1) 久留米大学大学院比較文化研究科

2) 久留米大学文学部

ている。

また、ソーシャルサポート研究も対人関係における支援という“つながり”に焦点を当てた研究の一つであろう。「ソーシャル・サポートは対人的な過程を通じてその効果を発揮するもの」(浦・南・稲葉,1989)であり、ストレスに対する直接効果や間接効果としての機能に焦点を当てた研究(福岡・橋本,1997; 嶋,1992)や、精神的健康や心理的幸福感との関連を検討した研究(福岡・橋本,1995; Lu,1997; 和田,1992)が数多くなされている。その中でも、特に対人的な“つながり”に焦点を当てた研究がある。Rook(1987)は、ソーシャルサポートと友好を区別し、ソーシャルサポートを問題解決志向的な援助が交換される対人的相互作用、友好を余暇の共有や内発的な目標のために行なわれるような活動として捉えている。この研究の結果として、友好は関係性の満足や孤独感に対しては、より大きな効果を及ぼすことが示された。つまり、満足や孤独感などのある種の感情に対しては、日頃の何気ない“つながり”(友好)がより影響を与えることを示唆したといえるだろう。

一方、臨床心理学の分野においては、近年、「つながりの感覚」の重要性が指摘されている。例えば、下山(1993)は、相手との「つながりの感覚」がもてない敏感関係妄想のクライアントに対して、「つながりの感覚」を取り戻すように関係性を調整する援助を試みている。また、岩橋・大崎(1998)は、痴呆性老人の自己感を明確にすることで「つながりの感覚」を生み出すような援助を行なっている。実践的な臨床場面において、対人的な“つながり”は重要な概念の一つとして捉えられつつあるといえるだろう。

このように、対人関係における“つながり”という言葉は、日常語としてのみならず、人間科学的概念としても重要な用語であると考えられる。しかし、これまでの研究では、前述の通り、ソシオメトリー研究は大局的な構造に、ソーシャルサポート研究は主として社会的資源からの支援に焦点があり、個人の“つながり”という概念について検討したものは少ないように思われる。数少ない中から例をあげると、三浦(1999)は、PAC分析(内藤,1997)を用いて、個人内の“社会とのつながり”の構造について考察し、一般的な構造のモデルを提示している。そのモデルでは、“社会とのつながり”は、「貢献的要素」と「被受容的要素」

で構成されており、別の視点からみると、「現実的側面」と「心理的側面」に分けられていた。しかし、比較的少数の調査対象者を用いた事例報告的研究であるために、一般的な構造の存在に示唆を与えるにとどまっている。そのため、より実証的な研究を行ない、“社会とのつながり”の一般的な構造を明らかにしていくことが必要であると思われる。

そこで、本研究では、“社会とのつながり”を「個人が認知している社会(他者)との相互作用」と定義して、“社会とのつながり”の構造を因子分析によって探索し検討することを第1の目的とする。

また、ソーシャルサポート研究など、これまでに多くの研究が、さまざまな社会的相互作用と心理的幸福感の関係についての検討を加えている。そしてその結果、ほとんどの研究において、社会的相互作用と心理的幸福感には何らかの有意な関係を見出している(e.g.牧野・田上,1998; Reich & Zautra,1981)。“社会とのつながり”は、「個人が認知している社会との相互作用」である。そのため、“社会とのつながり”と心理的幸福感の間にも関係があると考えられる。そこで第2の目的は、“社会とのつながり”と心理的幸福感との関係性について検討することである。先行研究の知見から、“社会とのつながり”は心理的幸福感と正の相関関係にあると考えられる。したがって、心理的幸福感は、“社会とのつながり”の得点の高い人のほうが低い人よりも、より高くなるであろう、と仮定することは不自然でない。

ところで、心理的幸福感や精神的健康に関する研究は数多く、その概念の捉え方や用語は多様である(石井,1997; Lu & Shin,1997)。例えば、和田(1992)は心理的幸福感を「生活に対する満足、ポジティブな気分を持てること」と定義し、孤独感・疾病徴候・充実感を取り上げており、孤独感・疾病徴候については「孤独でない、疾病徴候がないことが心理的に幸福であるというように、ネガティブな心理的側面を扱っている」と述べ、充実感については「ポジティブな心理的側面を扱っている」と述べている(和田,1995)。そこで、本研究でもネガティブおよびポジティブの心理的両側面を取り上げ、心理的幸福感の下位尺度として、疎外感および充実感を用いることにする¹。

なお、前述したように、不登校や頻発するいじめ問題など、中高生において“社会とのつながり”に焦点

1 心理的幸福感について、和田(1992,1995)は孤独感・心理的の疾病徴候・充実感を取り上げている。しかし、孤独感および心理的の疾病徴候については、その項目内容から、下位尺度に孤独感・空虚感・圧迫感などがある「疎外感」に含まれると考えられる。そこで、本研究では心理的幸福感のネガティブな側面の尺度として、疎外感尺度を用いた。

を当てた研究が必要であり、また、社会化などの発達の観点からも“社会とのつながり”の形成は重要な問題であると思われる。

そこで、本研究では、調査対象を中学生および高校生とし、“社会とのつながり”の構造および心理的幸福感との関係について検討する。

方 法

調査対象者および手続き

調査は、1998年9月に、F県内の中学生（1年生～3年生）および高校生（1年生・2年生）を対象として実施された。なお、調査に用いられた質問紙は、“社会とのつながり”測定用100項目（頻度50項目・重要度50項目）、疎外感尺度（44項目）、充実感尺度（11項目）およびフェイスシート（性別・学校・学年）によって構成されている。この質問紙は、無記名法であり、依頼された各クラス担任がホームルームなどの時間に被調査者に配布し、集団で一斉に実施された。十数分の回答時間の後、回収された。回収総数は403名であったが、著しい記入漏れのあったものや、規則的にマークするなど故意に回答を操作していると思われるものを除き、有効回答として、391名（男子中学生110名・男子高校生112名・女子中学生93名・女子高校生76名）を分析対象とした。

“社会とのつながり”の測定

“社会とのつながり”を測定する尺度を作成するために、三浦（1999）で収集された“社会とのつながり”に関する会話記録をもとに、質問文を作成した。質問文作成の基準は、“社会とのつながり”に関係すると思われる対人的な相互作用であり、できるだけ具体的な「行動」を表現するように配慮した。なお、このとき、「貢献的要素」および「被受容的要素」を測定すると思われる質問文となるように考慮しながら、50項目の質問文を作成した。この50項目の質問文について、頻度と重要度を尋ねる質問項目を作成した。頻度のみでなく重要度を測定するのは、ある具体的な「行動」が被調査者によって意味合いが異なることを考慮したためである。また、頻度を尋ねる項目の一部は、逆転項目として反意になるように作成し、その項目は、50項目中8項目であった。

以上、“社会とのつながり”を測定する項目として、頻度50項目と重要度50項目の計100項目を得た。

質問項目の内容的妥当性を検討するために、心理学専攻の大学院生A,Bの2名が、個別に判定を行なった。判定の基準としては、「社会的相互作用が生じた

と考えられるかどうか」であった。その結果、Aは6項目を不適當とし、Bは7項目を不適當とした。そこで、両者が一致して不適當とした6項目については直ちに除外し、Bのみが不適當とした項目も協議の結果、質問項目の文意が多義的であるため除外することにした。そこで分析には、7項目を除外した43項目を用いることにした。

心理的幸福感の測定

本研究では、心理的幸福感を測定する尺度として、疎外感尺度および充実感尺度を用いた。

疎外感尺度は、宮下・小林（1981）が作成した「疎外感尺度」であり、孤独感・空虚感・圧迫拘束感・自己嫌悪感の4つの下位尺度で構成されている44項目からなる質問紙である。充実感尺度は、大野（1984）が作成した「充実感尺度」の一部を用いた。この尺度は、「充実感気分」・「自立・自信」・「連帯」・「信頼・時間的展望」の4つの下位尺度で構成されている38項目からなる質問紙である。しかし、項目内容を検討すると、「充実感気分」以外の因子の項目は、充実感に関連する概念を測定していると思われるため、本研究では「充実感気分」因子のみを「充実感尺度」として用いることにした。疎外感尺度および充実感尺度の評定については、「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の5段階評定を用いた。

結 果

“社会とのつながり”尺度の検討

前述の通り、重要度によって“社会とのつながり”の意味づけが規定されると考える。そこで、対応する頻度と重要度を掛け合わせて得点化したものを、“社会とのつながり”の得点とした。

頻度の各項目の回答は、「よくある」を+2点～「どちらともいえない」を0点～「めったにない」を-2点（ただし、逆転項目を意図して作成した8項目については、「よくある」を-2点～「めったにない」を+2点）として、重要度の各項目の回答は、「とても重要」を5点～「全く重要ではない」を1点として得点化した。そして、対応する頻度得点と重要度得点を掛け合わせて、+10～-10点の範囲の得点を求め、これに一律に10を足して、最終的に20～0点の範囲の得点を43項目について求めた。

各項目の得点の平均と標準偏差を求め、「平均±標準偏差」の値が得点の範囲（0～20点）をこえた3項目については、天井効果が生じたものと判断し、分析からは除外した。

残った40項目について因子分析（主成分分解）を行なったところ、尺度作成時において「逆転項目」として作成した8項目が、一つの因子として抽出され、因子の意味を解釈することが困難であった。このため、この8項目を除外して32項目について因子分析（主成分分解）を行なったところ、固有値の減衰状況および解釈可能性から、3因子解が適当と判断した。そこで、著しく共通性の低かった項目を除外して再度因子分析（主成分分解）を行なった。その結果、最終的に分析に用いた項目数は23項目であった。このとき、全体に対する3因子の累積説明率は42.48%であった。斜交回転（Promax法）後の因子負荷量を、TABLE 1に示した。なお、因子間相関は、I - II間は $r = .41$ 、I - III間は $r = .33$ 、II - III間は $r = .19$ であった。

第I因子は、自分もしくは自分のした行為が他人に受け入れてもらえるといった“つながり”の項目や、逆に他人を自分が受け入れるといった“つながり”の項目が含まれていたため、「受容的つながり」因子と命名した。第II因子は、形式的なつきあいや何かのやりとりの“つながり”の項目が含まれていたため、「道具的つながり」因子と命名した。第III因子は、他人に対して援助したり貢献するといった“つながり”

の項目が含まれていたため、「貢献的つながり」因子と命名した。以上、本研究では“社会とのつながり”尺度として、第I因子「受容的つながり」13項目、第II因子「道具的つながり」5項目、第III因子「貢献的つながり」5項目、計23項目を得た。

各因子の信頼性（Cronbachの内的整合性）については、第I因子は $\alpha = .857$ 、第II因子は $\alpha = .683$ 、第III因子は $\alpha = .697$ であった。第I因子については信頼性が確認されたといえる。第IIおよび第III因子については、それぞれ項目数が5項目と少ないため、信頼係数がやや低い値になったと思われる。

因子分析の結果に従い、各被調査者の回答について、各因子ごとに加算した項目合計得点を項目数で除した値を各因子の得点として、以後の分析には使用した。得点が大いほど、それぞれ、受容的つながり、道具的つながり、貢献的つながり、が高いことを意味する。

心理的幸福感の尺度の検討

疎外感尺度について、先行研究に従い因子数4を仮定した因子分析（最尤因子解）を行なったところ、先行研究とは全く異なる結果が得られたため、因子構造を再検討した。その結果、解釈可能性から5因子解が適当と判断し、最終的に、①「孤独感」因子10項目

TABLE 1 「社会とのつながり尺度」の因子

項目内容	I	II	III
I: 受容的つながり			
一つの目的・目標に向かってみんなで協力しあう	.753	-.214	.047
ありのままの自分を人が受け入れてくれる	.733	-.039	-.137
自分が何かをしたことで、人が喜んでくれる	.721	.027	.037
自分の人柄や性格を人からほめられる	.711	-.026	-.051
自分にとって大切な人から自分が大事にされている	.614	-.175	.153
人と一緒に居てリラックスできる	.599	-.006	-.018
自分のしたことを人からほめられる	.560	.203	.009
自分は集団の一員だという感じがする	.533	.087	.014
自分のやりたいことをやらせてもらえる	.494	.120	-.079
誰かを応援したり、はげましたりする	.492	.082	.153
人から何かを頼まれる	.449	.237	.036
自分の意見が人と同じ	.444	.096	.110
自分の能力を発揮することを求められる	.435	.280	-.044
II: 道具的つながり			
人からものを借りる	-.274	.713	.015
友達から電話がかかってくる	.121	.654	.043
何かの集まりに誘われる	.185	.612	-.043
人にものを貸す	-.012	.556	.202
人を笑わせたり、おもしろがらせたりする	.272	.500	-.078
III: 貢献的つながり			
アルバイトやお手伝いなどをする	.013	-.082	.836
家事(炊事、洗濯、掃除)をする	-.021	-.103	.813
ボランティア活動や奉仕活動をする	-.019	.144	.551
電車やバスの中で人に席をゆずる	-.012	.169	.516
人を助けたりする	.220	.210	.401
説明分散	5.858	3.555	3.031

($\alpha = .839$), ②「空虚感」因子9項目 ($\alpha = .881$), ③「圧迫感」因子8項目 ($\alpha = .816$), ④「無力感」因子6項目 ($\alpha = .835$), ⑤「自尊心」因子6項目 ($\alpha = .807$) の計39項目を得た(累積説明率44.31%)。

充実感尺度について, 先行研究に従い因子数1を仮定した因子分析(主成分法)を行なった。その結果, 因子構造は従来の研究結果と一致した。全11項目を分析に用いており, 全体に対する因子の説明率は53.35%であった。Cronbachの内的整合性は, $\alpha = .908$ であり, 信頼性は確認された。

そこで, 因子分析の結果に従い, 疎外感尺度および充実感尺度の各項目の回答について, 5点~1点に得点化した。そして各被調査者の回答について, 加算した項目得点を項目数で除した値を因子の得点として, 以後の分析には使用した。得点が高いほど, 孤独感, 空虚感, 圧迫感, 無力感, 自尊心, 充実感が高いこと

を意味する。

社会とのつながり尺度と心理的幸福感の相関分析

社会とのつながり尺度と心理的幸福感の各尺度の関係を検討するため, 相関係数を求めた。「受容的つながり」と心理的幸福感の相関をTABLE 2に示す。特に高校生において圧迫感と無力感についてはやや相関が低いものの, ほとんどすべての心理的幸福感の尺度と相関がある。また, 「道具的つながり」については, 全体の孤独感との間に弱い相関がみられ ($r = -.234, p < .01$), 「貢献的つながり」については, 女性の空虚感 ($r = -.228, p < .01$), および, 男子中学生の自尊心 ($r = .256, p < .01$) との間に, 弱い相関がみられた。

この結果から, “社会とのつながり”のなかで, 特に「受容的つながり」が心理的幸福感に強く関係していることが明らかとなった。

TABLE 2 「受容的つながり」と心理的幸福感の相関

	全体	男	女	中学	高校	男・中	男・高	女・中	女・高
孤独感	-.474	-.477	-.440	-.481	-.464	-.517	-.431	-.441	-.447
空虚感	-.341	-.387	-.340	-.350	-.360	-.437	-.385	-.319	-.403
圧迫感	-.242	-.258	-.230	-.352		-.393		-.285	
無力感	-.223	-.288		-.247	-.200	-.354			
自尊心	.346	.396	.366	.427	.275	.549	.288	.402	.328
充実感	.395	.440	.372	.425	.387	.485	.431	.389	.378

(注) 無相関検定において有意($p < .01$)な相関係数のみ表示

TABLE 3 社会とのつながり各因子の低・中・高群ごとの心理的幸福感得点

受容的つながり	低群 (n=105)	中群 (n=174)	高群 (n=112)
孤独感	2.91 (0.76)	2.57 (0.66)	2.10 (0.65)
空虚感	3.59 (0.75)	3.22 (0.88)	2.83 (1.00)
圧迫感	3.06 (0.76)	2.93 (0.78)	2.69 (0.89)
無力感	3.21 (0.90)	2.98 (0.84)	2.79 (0.91)
自尊心	2.73 (0.85)	3.02 (0.73)	3.41 (0.78)
充実感	2.56 (0.78)	3.03 (0.82)	3.41 (0.93)
道具的つながり	低群 (n=104)	中群 (n=194)	高群 (n=93)
孤独感	2.74 (0.83)	2.51 (0.69)	2.34 (0.73)
空虚感	3.40 (0.81)	3.18 (0.95)	3.05 (0.96)
圧迫感	2.93 (0.80)	2.88 (0.81)	2.91 (0.85)
無力感	3.05 (0.94)	2.92 (0.85)	3.05 (0.92)
自尊心	2.83 (0.80)	3.15 (0.78)	3.12 (0.86)
充実感	2.82 (0.80)	3.05 (0.91)	3.14 (0.94)
貢献的つながり	低群 (n=112)	中群 (n=163)	高群 (n=116)
孤独感	2.53 (0.74)	2.54 (0.73)	2.52 (0.79)
空虚感	3.35 (0.88)	3.26 (0.90)	3.00 (0.97)
圧迫感	2.90 (0.78)	2.91 (0.77)	2.88 (0.91)
無力感	2.96 (0.90)	3.00 (0.86)	2.99 (0.93)
自尊心	2.93 (0.81)	3.07 (0.82)	3.16 (0.80)
充実感	2.91 (0.88)	2.99 (0.84)	3.14 (0.97)

(注) 表中の括弧内は標準偏差

つながり得点による分散分析

社会とのつながり尺度と心理的幸福感の関係が単調関係にあるかどうかを検討するため、受容的つながり・道具的つながり・貢献的つながりの各因子の得点によって3群に分けて、各群間の心理的幸福感の得点比較を行なうことにした。3群の基準は、「平均±1/2標準偏差」の範囲に入る群を中群、「平均-1/2標準偏差」以下の群を低群、「平均+1/2標準偏差」以上の群を高群とした。各因子（受容的つながり・道具的つながり・貢献的つながり）による3群（低群・中群・高群）ごとに求めた心理的幸福感各因子の得点の平均と標準偏差を、TABLE 3に示した。

「受容的つながり」による群（低・中・高）の1要因分散分析によって、心理的幸福感各尺度の得点の分析を行なった。その結果、孤独感 ($F_{(2,388)}=38.47, p<.01$)・空虚感 ($F_{(2,388)}=19.60, p<.01$)・圧迫感 ($F_{(2,388)}=5.78, p<.01$)・無力感 ($F_{(2,388)}=6.50, p<.01$)・自尊心 ($F_{(2,388)}=21.19, p<.01$)・充実感 ($F_{(2,388)}=27.21, p<.01$)のすべての尺度について、主効果が認められた。そこで多重比較 (tukey法) を行なった結果、すべての尺度について、低群-高群間で有意差がみられた。つまり、「受容的つながり」の得点の高い人は低い人に比べて、孤独感・空虚感・圧迫感・無力感が低く、自尊心・充実感が高い、という結果であった。

「道具的つながり」による群（低・中・高）の1要因分散分析によって、心理的幸福感各尺度の得点の分析を行なった。その結果、孤独感 ($F_{(2,388)}=7.15, p<.01$)・空虚感 ($F_{(2,388)}=3.71, p<.05$)・自尊心 ($F_{(2,388)}=5.73, p<.01$)・充実感 ($F_{(2,388)}=3.49, p<.05$)の尺度について、主効果が認められた。そこで多重比較 (tukey法) を行なった結果、それぞれの尺度について、低群-高群間で有意差がみられた。つまり、「道具的つながり」の得点の高い人は低い人に比べて、孤独感・空虚感が低く、自尊心・充実感が高い、という結果であった。

「貢献的つながり」による群（低・中・高）の1要因分散分析によって、心理的幸福感各尺度の得点の分析を行なった。その結果、空虚感 ($F_{(2,388)}=4.44, p<.05$)について、主効果が認められた。多重比較 (tukey法) を行なった結果、低群-高群間で有意差がみられた。つまり、「貢献的つながり」の得点の高い人は低い人に比べて、空虚感が低い、という結果であった。

以上の結果から、“社会とのつながり”のなかで、特に「受容的つながり」が心理的幸福感に関係してい

ることが再度確認された。

つながり頻度・重要度による分散分析

本研究において、重要度は、頻度と心理的幸福感の関係に媒介変数的な役割を果たすと考えて測定された。すなわち、重要度の得点が高ければ、頻度の得点の高低が心理的幸福感に大きく影響すると考えられ、重要度の得点が低ければ、頻度の得点の高低は心理的幸福感にさほど影響を及ぼさないと考えられる。

そこで、つながり頻度と心理的幸福感の関係に与えるつながり重要度の影響を調べるため、社会とのつながり尺度の3因子について、つながり頻度およびつながり重要度の各因子の得点を求め、その平均を基準として、それぞれ上下の2群に分け、高頻度F・低頻度f、高重要度I・低重要度iの水準を設定した。そして、心理的幸福感各尺度の得点について、頻度×重要度の2要因分散分析を行なった。仮説としては、頻度と重要度の交互作用がみられる、というものであった。その結果、「受容的つながり」については、空虚感で交互作用 ($F_{(1,387)}=4.76, p<.05$; FI群n=132, Fi群n=71, fi群n=59, fi群n=129; FIGURE 1) がみられた。単純主効果検定の結果、高頻度の重要度間 ($F_{(1,387)}=4.46, p<.05$; FI<Fi)、高重要度の頻度間 ($F_{(1,387)}=21.12, p<.01$; FI<fi) に有意差がみられた。「貢献的つながり」については、自尊心 ($F_{(1,387)}=5.58, p<.05$; FI群n=130, M=3.15, SD=0.78, Fi群n=60, M=2.92, SD=0.72, fi群n=81, M=2.93, SD=0.83, fi群n=120, M=3.11, SD=0.87) で交互作用がみられた。単純主効果検定の結果、高頻度の重要度間 ($F_{(1,387)}=3.29, p<.10$; FI>Fi)、高重要度の頻度間 ($F_{(1,387)}=3.69, p<.10$; FI>fi) に有意差の傾向がみられた。

このことから、「受容的つながり」と空虚感、「貢献

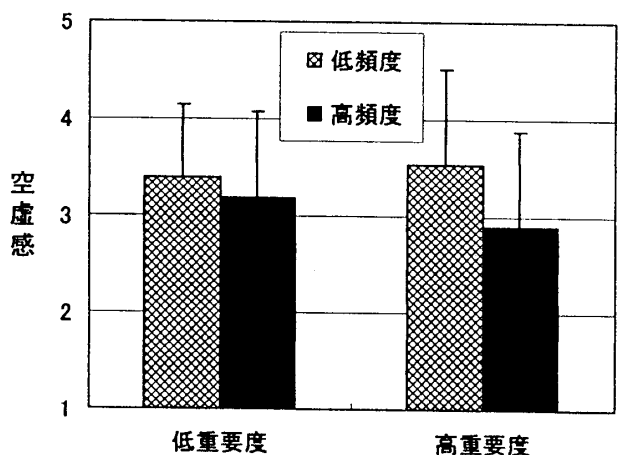


FIGURE 1 受容的つながりの頻度と重要度による空虚感得点

的つながり」と自尊感の関係においては、重要度が媒介変数的な役割を果たすことが示唆された。

考 察

本研究の第1の目的であった“社会とのつながり”の構造については、因子分析の結果、受容的つながり、道具的つながり、貢献的つながり、の3因子を得た。今回の被調査者は、中学生と高校生であり、生活の大半は学校生活にあることは明らかであろう。そのため、「本当の世界はすごく広いのに、子どもたちにとって、学校や教室が全世界になってしまう」（西,1997）という指摘もあるように、中学生と高校生にとっては、学校生活を中心として「社会」を捉えていると考えられる。その観点から、今回の結果を見てみると、「受容的つながり」は、学校生活における情緒的な“つながり”の側面、「道具的つながり」は、学校生活における道具的な“つながり”の側面、「貢献的つながり」は学校生活以外の場面での“つながり”の側面、と考えることもできるだろう。すると、大学生や成人などのように被調査者が異なれば、今回の結果とは異なる因子構造を示すかもしれない。そこで、今回の結果は、中学生と高校生という「学校社会」を中心とした被調査者による“つながり”の因子構造である、ということ踏まえる必要がある。

そこで、3因子の因子間相関を見ると、受容的—道具的間と受容的—貢献的間に相関がみられた。前述したように、「受容的つながり」と「道具的つながり」は学校生活における“つながり”であるためと考えられる。また、「受容的つながり」と「貢献的つながり」の相関から、受容的なつながりの高い者ほど他者に貢献できる、という解釈もできよう。このことから、中学生および高校生における“社会とのつながり”は、「受容的つながり」が中心的な役割を果たしていると思われるが、本研究で見出された“社会とのつながり”の因子構造の一般化には限界がある。そこで今後、大学生や成人などの年齢層を対象とした研究など、さらなる検討が必要であろう。

本研究では“社会とのつながり”と心理的幸福感の関係について検討することを第2の目的としており、“社会とのつながり”の得点の高い人は、低い人よりも、より心理的幸福感は高くなる、と考えた。

社会とのつながり尺度と心理的幸福感の相関分析において、全体的には、「受容的つながり」と心理的幸福感のすべての尺度との間に相関関係がみられ、「道具的つながり」と孤独感の間に弱い相関がみられた。

また、社会とのつながり尺度の低・中・高群間の心理的幸福感の分散分析において、「受容的つながり」では心理的幸福感のすべての尺度において、「道具的つながり」や「貢献的つながり」ではいくつかの心理的幸福感の尺度において、低群—高群間に有意差がみられた。

この結果から、中学生および高校生にとって、「受容的つながり」が心理的幸福感と最も密接な関係にあり、ついで「道具的つながり」と「貢献的つながり」が心理的幸福感の下位尺度のいくつかと関係があることが明らかとなった。つまり、「受容的つながり」の得点の高い人は低い人よりも、心理的幸福感をより多く感じていた。また、「道具的つながり」の得点の高い人は低い人よりも、孤独感・空虚感を感じておらず、自尊心・充実感を感じており、「貢献的つながり」の得点の高い人は低い人よりも、空虚感を感じていなかった。

このように、“社会とのつながり”の中でも特に「受容的つながり」が心理的幸福感と関係があった。このことから、中学生および高校生にとっては、「受容的つながり」が“社会とのつながり”の最も重要な要素であり、それが心理的幸福感に最も強く影響を及ぼしていると考えられる。中村（1998）が指摘しているように、「心理臨床の現場においては、クライアントから『居場所がない』ということばがしばしば聞かれる」ことがある。また、堤（1993）は不登校や家庭内暴力を呈す青少年は「どこにも心理的な居場所を見出せないのである」と述べている。このように、心理的居場所があると感じられるような“社会とのつながり”である「受容的つながり」が、中学生および高校生には必要であると考えられる。そのため、生活の中心である「学校は児童生徒にとって安心して自己を生かせる場、個性や能力、自主性や主体性を発揮できる場であること、つまり『心の居場所』であることが望まれる」（文部省,1997）であろう。

ところで、重要度は頻度と心理的幸福感の関係において、媒介変数的な役割を果たすことが考えられた。すなわち、重要度の得点が高ければ、頻度の得点の高低が心理的幸福感に大きな影響を与えられ、重要度の得点が低ければ、頻度の得点の高低は心理的幸福感にさほど影響を及ぼさないと考えられた。本研究では、「受容的つながり」と空虚感、「貢献的つながり」と自尊心の関係においては交互作用がみられ、重要度が媒介変数的な役割を果たしていることが示唆された。しかし、その他の関係においては交互作用がみ

られなかった。これは、重要度得点の平均が全体的に高いために、重要度の水準の設定が難しく、重要度の効果を十分に検討できなかったことが理由にあげられる。多くの中学生および高校生が、それらすべての“つながり”を本当に重要としているのか、それとも単に、社会的な望ましさの影響なのか、今後検討する必要があるだろう。

引用文献

- 福岡 欣治・橋本 宰 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, **43**, 185-193.
- 福岡 欣治・橋本 宰 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- 石井 留美 1997 主観的幸福感研究の動向 コミュニティ心理学研究, **1**, 94-107.
- 岩橋 宗哉・大崎 知子 1998 間主観的な場における体験の具体化とそれへの主観的妥当性確認 心理臨床学研究, **16**, 117-128.
- 狩野 素朗 1985a 個と集団の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 狩野 素朗 1985b コンデンセーション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, **24**, 111-119.
- 楠見 幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動・学級雰囲気・学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.
- Lu, L. 1997 Social support, reciprocity, and well-being. *Journal of Social Psychology*, **137**, 618-628.
- Lu, L., & Shih, J.B. 1997 Source of happiness: a qualitative approach. *Journal of Social Psychology*, **137**, 181-187.
- 牧野 由美子・田上 不二夫 1998 主観的幸福感と社会的相互作用の関係 教育心理学研究, **46**, 52-57.
- 三浦 直樹 1999 “社会とのつながり”感についての探索的研究—PAC分析を用いて— 久留米大学大学院比較文化研究論集, **5**, I, 1-19.
- 宮下 一博・小林 利宣 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究, **29**, 297-305.
- 文部省 1997 生徒指導資料第22集 登校拒否問題への取り組みについて(小学校・中学校編) 大蔵省印刷局
- 村山 正治 1992 カウンセリングと教育 ナカニシヤ出版
- 内藤 哲雄 1997 PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 中村 泰子 1998 居場所イメージに関する検討 日本心理学会第62回大会発表論文集, 138.
- 成田 国英 1998 子ども同士の間関係 島田 一男(監修) 講座:人間関係の心理3 学校の間関係 ブレーン出版 pp.75-91.
- 西 伸之 1997 居心地のいい学級・学校をめざして教育, **612**, 61-68.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, **32**, 100-109.
- Reich, J.W., & Zautra, A. 1981 Life events and personal causation: some relationships with satisfaction and distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 1002-1012.
- Rook, K.S. 1987 Social support versus companionship: effect on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1132-1147.
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 下山 晴彦 1993 心理療法過程における関係性の研究 心理臨床学研究, **10**, 4-16.
- 堤 啓 1993 不登校と家庭内暴力 精神療法, **19**, 518-529.
- 浦 光博・南 隆男・稲葉 昭英 1989 ソーシャル・サポート研究—研究の新しい流れと将来の展望— 社会心理学研究, **4**, 78-90.
- 和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, **40**, 386-393.
- 和田 実 1995 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, **11**, 11-17.

The relationship between “relatedness with society” and psychological well-being on junior and senior high school students

NAOKI MIURA (*Institute of Comparative studies of International Cultures and Societies, kurume University*)

KAZUMA HARAOKA (*Faculty of Literature, kurume University*)

The purpose of this study was to explore a psychological structure of "relatedness with society" ("Shakai tono tsunagari") and to investigate the relationship between "relatedness with society" and psychological well-being. The survey of "relatedness with society" and psychological well-being was conducted to 391 junior and senior high school students. The questionnaire to measure psychological well-being consisted of six measures: a sense of isolation, emptiness, pressure, incompetence, self-esteem and fulfillment. The results of exploratory factor analysis showed three factors: Acceptance relatedness, Instrumental relatedness, Contributory relatedness. Acceptance relatedness was negatively correlated with isolation, emptiness, pressure and incompetence, and was positively correlated with self-esteem and fulfillment. Instrumental relatedness and Contributory relatedness was correlated with a few measures of psychological well-being. In addition, the effect of the importance of "relatedness with society" on the relationship between the frequency of "relatedness with society" and psychological well-being was considered. These results suggested that "relatedness with society", especially Acceptance relatedness, was related to psychological well-being of junior and senior high school students.

Key words: high school students, relatedness with society, psychological well-being.

